

阮籍「詠懷詩」

——仙界の描き方の特徴について——

鄭 月 超

一 はじめに

阮籍(二一〇—二六三、字・嗣宗)は正始期に生き、その時代においてひとときわ抜きんでた存在である。『世説新語』に見える彼の奇行や複雑な世の中を生き抜くその処世術は、人々の関心を引き付けるのに十分な異彩を放つとともに、彼は詩人としての名声も高い。鍾嶸は『詩品』巻上において、彼の詩を上品に置き、同時期の詩人の中で最も高く評価している。八十二首からなる五言の「詠懷詩」⁽¹⁾は彼の代表作である。ここではこの八十二首の「詠懷詩」に主眼を置き、とりわけ、詩中に詠まれた空間——仙界——に注目していくこととする。

阮籍は「詠懷詩」八十二首中、三十数首に仙界、あるいは仙に関わるものを描き込んでいる。吉川幸次郎が『阮籍の「詠懷詩」について』⁽²⁾において、「神仙の生活へのあこがれを示す詩は甚だ多く、全「詠懷詩」を通じて最もしばしば現れる主題の一つである」(p.33)と指摘しているように、彼の仙界に対する関心は非常に強い。吉川幸次郎はその理由を「要するに阮籍は、過剰のない故に永遠な生活を希求し、その理想形として希求の中心にあるものは神仙の生活である」(p.107)としている。仙界はもともと、過剰のないゆえの永遠な生活を内包しているか

のようである。しかし、漢代楽府や建安詩中に詠まれている仙界を見てみると、阮籍の憧れとするところの環境を必ずしも兼ね備えているわけではない。「詠懐詩」中における理想とされる仙界はそれまで描かれてきた仙界から変容し、その結果、阮籍の希求するような空間が整ったと見るべきである。小論は、「詠懐詩」中に詠まれた仙界の特質や、また、それがいかに形作られたのかに目を向け、そこから「詠懐詩」に詠まれた仙界の独自性の一端を明らかにしようとするものである。

二 不老不死の仙界

仙界は漢代楽府をはじめ多くの詩に詠まれてきた。そのおおよその共通性として、仙境は人びとにとって永劫の命を実現できるユートピアとして描かれているということが挙げられる。たとえば、漢代楽府「長歌行」では詩中の主人公が登仙し「身体日に康強たり、髪白きも復た黒きに更る、延年壽命長し」と仙界で入手した回春薬を服したあと若返っていく過程が詠まれている。続く魏代でも仙なるものに延命の可能性を託した詩が多く残されている。たとえば、曹植「飛龍篇」では、「我に仙薬を授け、神皇の造る所なり。我をして服食せしめ、精を還し脳を補ふ。寿は金石と同じくして、永世老い難し」と、主体が仙化し、不老の体を得た様子が詩中において展開されている。彼らの描く仙界は永遠の命と深く結びつき、仙境は老死から免れる場として詩人達を魅了していた。

阮籍「詠懐詩」に描かれている仙界は時間の蚕食から免れる点において先行する諸家と重なる。阮籍は時間の移ろいに大変敏感であり、「詠懐詩」に、「朝は媚い少年たりしも、夕暮には醜老と成る（朝爲媚少年、夕暮成醜老）」（其四）や、「顔色 平常を改め、精神 自ら損消す。胸中 湯火を懐き、変化 故に相招く（顔色改平常、

精神自損消。胸中懷湯火、變化故相招」(其三十三) というように、時間によって磨滅されていくことへの危機感が繰り返し述べられている。流れ去っていく時間は、万物を美から醜へ、生から死へと変化させる。阮籍はまたしばしば「願はくは雲間の鳥と為り、千里 一たび哀鳴せん。三芝 瀛洲に延べ、遠遊して長生すべし」(其二十四)と、神仙の空間に行き、時間の支配から逃れ、長生したいと詠っている。

人びとは古くから死を恐れ、不滅の生に価値をおいてきた。「詩経」小雅「信南山」に「我が尸賓に昇えば、寿考万年ならん(昇我尸賓、壽考萬年)」と万年続く寿命を願う様子が歌われている。また、「史記」「秦始皇本紀」に始皇帝が盧生を遣わし、仙薬を探し求めさせる有名な逸話が載せられている。ここに、古の人間の長生への切望を垣間見ることが出来る。不老不死を可能とする場としての「詠懐詩」の仙界像は従前の詩の継承であるとともに、古来より続く人間の生への渴望が反映されているともいえよう。

三 清逸な仙界

「詠懐詩」中における仙界は時間から解放された空間であるとともに、清逸な空間としても詠まれている。勿論これまでも神仙世界は人々の憧れの対象であり、好意的に描かれてきた。例えば、その廣大無辺さ、そこで得られる人間を超越する身体能力などが挙げられる。「詠懐詩」における仙界は、殊に俗世の劣悪さが浄化されている清逸な空間として描かれる。下記の「詠懐詩」其五十七において、仙境は辭屈とした人間界からの脱出先となっている。

驚風振四野 驚風 四野に振ふ

迴雲蔭堂隅 迴雲 堂隅を蔭ふ

牀帷爲誰設

牀帷 誰が為に設け

几杖爲誰扶

几杖 誰が為に扶く

雖非明君子

明君子に非ずと雖も

豈闇桑與榆

豈に桑と榆より闇からんや

世有此聾聵

世に此の聾聵有り

茫茫將焉如

茫茫として將に焉くにか如かんとす

翩翩從風飛

翩翩として風に従ひて飛び

悠悠去故居

悠悠として故居を去る

離麾玉山

離れて玉山の下を麾し

遺棄毀與譽

毀と譽とを遺棄せん

前半の七句において人間界の醜悪さが並べられ、続く句において、どこへ行けばいいのだろうか、主人公は憂うべき人間界から離れ、仙境の玉山に身を置きたいと考える。仙境は現実世界での苦悩から解放された理想な空間としてとらえられる。

俗世を憂い仙界へ出かけることは、早くに屈原の「離騷」に見られる。そして、天上界を希求する理由として「固より時俗の工巧にして、規矩に倣きて改錯す。繩墨に背きて曲に追ひ、周容を競ひて以て度と爲す（固時俗之工巧兮、倣規矩而改錯。背繩墨以追曲兮、競周容以爲度）」と俗世の暗愚さを挙げてゐる。彼は人間界を離れることで、こうした不満が解消されることを期待していた。しかし、彼の苦悩は仙境においても癒えることはなく、「離騷」中の仙界は、結果として人間界における不平を補完できる空間ではなかった。

他に、屈原の作品とされる「遠遊」においても、「時俗の迫阨を悲しみ、輕拳して遠遊せんことを願ふ（悲時俗之迫阨兮、願輕拳而遠遊）」と俗世からの逃避の願望が詠まれている。ここでは、仙界へ遊ぶことにより、人間界での圧迫感^{あつぱく}は解消される。しかし、「旧故を思ひて以て想像し、長太息して涕を掩ふ（思舊故以想像、長太息而掩涕）」というように、仙境では望郷という新たな愁傷が生まれ、仙界は時と場合によって、詩人に苦悩をもたらし得る空間となる。これに比べ、「詠懐詩」中に見える仙界は、負の要素が一切排除された完璧な空間としての側面が専らとらえられ、より理想的に描かれている。

煩わしい俗世からの脱出先としての仙界は、続く漢代楽府や建安詩においてはあまり見られない。その代わり仙境は無限の生を内包する空間として描出される。不老不死ゆえ仙界に憧れを抱く、あるいは、仙界に遊べば延命できるといった内容の詩が大きな割合を占める。

醜悪な俗世からの逃避先としての仙界が再び多く詠まれるようになるのは「詠懐詩」中においてである。八十二首からなる「詠懐詩」に仙界表現を含む篇は三十首余りあるが、このうち凡そ八首に仙界を世事の煩わしさが排除された空間として詠んでいる。あるいは、仙なる要素に劣悪な俗世から解放してくれる可能性を見出している。

「詠懐詩」におけるこうした仙界の役割は、世の中を否定すべき対象として捉えることによって成り立つものである。阮籍が俗事、俗人に対し否定的な態度でもって接することの理由の一つとして、老荘哲学の影響が指摘できるだろう。周知のように阮籍の生きた時代、老荘思想が流行した。『晋書』「阮籍伝」に、「群籍を博覽し、尤も莊老を好む（博覽羣籍、尤好莊老）」と阮籍が特に老子、莊子を好んでいたことが紹介されている。「詠懐詩」中においてもその片鱗を見ることができ、「彼の莊周子を視れば、榮枯 何ぞ頼むに足らん（視彼莊周子、榮枯何

足頼) (其三八)と莊子の哲学でもって人生に接すれば、榮枯盛衰など取るに足らない、と詠んでいる。莊子は自然を尊び、人為的な小賢しきや煩雑さに対しては否定的である。⁽⁸⁾「詠懷詩」に見られる仙界の詠出は、俗世間において有益だと思われる、たとえば智や地位などを退けるといふ老莊哲学の影響を無視できない。

四 「詠懷詩」の中の仙界と人間界の關係

阮籍が仙界を描くとき、彼は常に人間界を意識する。「詠懷詩」における仙界は、地上の生命の短促さと俗世での苦惱の両方が解消される空間である。仙界のこうした特徴は人間界を意識した結果であるといえよう。詩の構造からも、阮籍が漢魏の諸詩人に比べ、人間界により関心を寄せていたことを見て取れる。

先行作品では、仙境を詠むに際し、人間界の様相を必ずしも振り返っていない。たとえば、曹操「陌上桑」⁽⁹⁾において、仙境での自身の遊仙体験が中心となり、詩中に人間界をうかがい知る描写はない。また、曹丕の「折楊柳行」⁽¹⁰⁾においても、仙境の風景や自身の羽化の経験に描写を費やし、人間界には触れていない。詩句は時間を追って展開されていき、その内容はすべて仙界が舞台となっている。

一方、「詠懷詩」の仙界詩群のほとんどの詩において、仙界は人間界とともに詠まれる。⁽¹¹⁾詩の構造として、仙界のみで完結するのではなく、同じ詩に地上界の様子も描写されている。仙界を思い描くとき、阮籍は人間界の様相を常に意識していたことになる。「詠懷詩」中において両空間は深い関わりを持つているのである。

詩中の両空間の關係という視点で見ると、その關係を三つに分けることができる。まず、仙界と人間界の特徴が対比され詠まれている詩群である。

清露被皋蘭

清露は皋蘭を被ひ

凝霜霑野草

凝霜は野草を霑す

朝爲媚少年

朝には媚い少年たりしも

夕暮成醜老

夕暮には醜老と成る

自非王子晋

王子晋に非ざるよりは

誰能常美好

誰か能く常に美好ならん

其四（※部分）

地上では、草花はいずれ枯れ、人間はいつか衰える。榮華を極めたからといって、それが永久に続くはずはない。人間は仙人の王子晋ではないのでいつまでも最良の状態ではいられない、とある。下降する人間と理想の状態に留まる仙人とが対比され詠まれている。他にも、

「焉んぞ敢て千術を希はん、三春 微光を表はす。凌風樹に非ざるよりは、憔悴して鳥くんぞ常あらん」（焉敢希千術、三春表微光。自非凌風樹、憔悴鳥有常）（其四十四※部分）

「昔 神仙なる者あり、羨門 及び松喬。九陽の間に喻習し、升遐して雲霄を嘖ふ。人生 長久を樂しみ、百年 自ら違なりと言ふ。白日は隅谷に隕ち、一夕 再び朝せず」（昔有神仙者、羨門及松喬。喻習九陽間、升遐嘖雲霄。人生樂長久、百年自言違。白日隕隅谷、一夕不再朝）（其八十一※部分）

「墓前の熒熒たる者、木槿 朱華を耀かす。榮好 未だ朝を終ずして、連颯 其の葩を隕す。豈に西山草、琅玕と丹朮に若かんや」（墓前熒熒者、木槿耀朱華。榮好未だ朝を終ずして、連颯其の葩を隕す。豈に西山草、琅玕與丹朮）（其八十二※部分）

と仙なる無限な生と有限な人間界での生という対照的な二つの命のあり方が引き合わされている。永劫にも似た時間を生きる仙の前に、「三春」「百年」「未終朝」という世上の生命の短促が強調される。

従前の作品にも仙界と人間界の命の長短が対比され詠まれている詩がある。例えば「古詩十九首」其十五⁽¹²⁾では、人間の命の百年に満たないことに言及し、人生を一杯楽しむべきだという。最後に「仙人の王子喬、与^よに期を等しくすべきこと難^{かた}し」と人間は仙人・王子喬（王子晋）のような長生きはできないのだから、と詩は締めくくられる。仙人の存在により人間は儂いものとして実感される。

「古詩」では短い人生をいかにして楽しむべきかを詩中で探ろうとしているのに対し、「詠懐詩」においては、人間界の儂さと永続する生を内包する仙界という対照的な事実を提示し、簡単に俗世での生活を受け入れようとはしない⁽¹³⁾。彼にとつて命の短さを埋め合わせてくれる要素は俗世にはなく、人間界への拒否は彼の場合、より根本的であるといえよう。

次に、感情を介し仙界と人間界が詩中において結びついている詩群である。「詠懐詩」に見られる仙界表現を含む篇の中で、仙に対する憧憬、敬慕、称賛、あるいは仙の存在にまつわる懷疑や落胆といった自身の気持ちを詠んだ詩がもつとも多く、その数二十首近くを数える。詩中において、仙界に寄せる諸々の思いの出発点となっているのが人間界の醜悪である。これが仙界と人間界の二つ目の関係である。次に挙げる「詠懐詩」其三十五では、仙界に身を置きたいと願うが、世上の慌しさや、命の脆弱さが布石となっている。

世務何續紛 世務 何ぞ續紛たる

人道苦不遑 人道 遑^{いとま}あらざるに苦しむ

壯年以時逝 壯年 時を以て 逝^もき

朝露待太陽 朝露 太陽を待つ

願攬羲和轡 願はくは羲和の轡^{くわ}を攬^とり

白日不移光 白日をして 光を移さしめざらんことを

天階路殊絶 天階 路 殊に絶え

雲漢遼無梁 雲漢 遼かにして梁 無し

濯髮鳴谷濱 髮を鳴谷の浜に濯ひ

遠遊崑岳傍 遠く崑岳の傍に遊ぶ

登彼列仙岨 彼の列仙の岨に登り

採此秋蘭芳 此の秋蘭の芳を採る

時路鳥足爭 時路 鳥くんぞ争ふに足らん

太極可翱翔 太極 翱翔すべし

最初の四句に人間界に生きる苦悩が取り上げられる。命は短く、それを全うする過程も慌しい世人や世事に追われ、決して平坦ではない。続く句に、時間の流失を象徴する太陽の運行を止めたいと思うも天への道は閉ざされ雲漢へは行けない、とある。九句から十四句では仙境に思いを馳せ、そこで「髮を濯」い、山に「登」り、花を「採」り、「太極」を「翱翔」という一連の行動が空想される。仙境では、詩の初めに詠まれたような地上界における慌しさや命の儚さへの憂懼は消え、詩人の悠々自適な様子が描かれる。神仙世界は時間から解放された空間であるとともに、世俗の繁忙さからも逃れられる空間として詩中に詠まれている。一方が苦痛に満ちた空間であり、一方がそれを超克した理想の空間である。阮籍にとって俗世での受け入れがたい要素がちょうど浄化された世界、それが仙界となっている。先に挙げた「詠懐詩」其五十七においても、仙境を希求する原因として人間界の不条理さをあげ、仙界はその劣悪たるゆえの世上の愚昧さが排除された空間として詠まれている。醜悪

の有無という軸で考えるならば、仙界はまさに人間界を反転した空間となっている。

仙界と人間界は従前の詩において、正負というように対照的に捉えられてきたわけではない。漢代楽府や建安詩において、仙界の描写のみの詩が多く、また、一首に両空間が詠まれることはあっても、必ずしもその優劣は詠み分けられていない。たとえば、漢代楽府「隴西行」⁽⁹⁾において、天上界の長閑な場面とともに、「顧みて世間の人を視るに、楽たること甚だ独り殊なり。好婦出でて客を迎え、顔色 正に愉を敷く」と描かれている人間界は、楽しい様子である。また、特に建安詩において、仙界は人間界を彷彿させるような描写もされている。⁽¹⁰⁾ 例えば、曹操の「氣出倡」において、「酒と歌戲、今日相樂しみ誠に樂しみを為さん。玉女起ち、起ちて儷い數時を移す。(中略) 來たる者は誰為らん、赤松と王喬乃ち徳と旋と門と、樂しみ共に飲食して黄昏に到る。(酒與歌戲、今日相樂誠爲樂、玉女起起儷移數時。(中略) 來者爲誰、赤松王喬乃徳旋之門、樂共飲食到黄昏)」と、人間界と同じような仙界の宴が描かれている。

一方、「詠懐詩」においては、両空間の正負ははっきりと詠み分けられている。仙界は醜悪な人間界とは対極にある清らかな空間として象られ、両者はこれまでにないほどに明確に切り離されている。両空間を隔てる垣根は高くなり、互いが互いの空間への出入りは容易ではなくなる。詩中において、人間界に生まれたものは人間界に留まったままであり、仙界に属する存在は人間と交わることはほとんど見られない。「詠懐詩」における仙界と人間界は独立した空間であり、互いに影響し合うことはない。両者に付された善悪のイメージは交差することなく、両極に位置したままである。阮籍の目を通して人間界は認識され、そこで感じ取った負の要素が土台となって形作られた仙界は、一人の人間によって個性化された仙界であるといえよう。

仙界と人間界の關係の三つ目は、特殊な対比である。劣悪な環境である世上と理想郷としての天上界。対照的

な両空間は「詠懐詩」中で深い関わりを持つ。このため、個別の詩において、例えば具体的な世上の説明を介さなくとも仙界の描写部分から人間界の醜さを見出すことができる。其二十三がその一例である。

東南有射山 東南に射山有り

汾水出其陽 汾水 其の陽より出づ

六龍服氣輿 六龍 氣輿に服し

雲蓋切天綱 雲蓋は天綱に切る

仙者四五人 仙者 四五人あり

逍遙晏蘭房 逍遙 蘭房に晏む

寢息一純和 寢息 一に純和にして

呼噲成露霜 呼噲 露霜と成る

沐浴丹淵中 沐浴す丹淵の中

炤耀日月光 炤耀す日月の光

豈安通靈臺 豈に通靈臺に安んぜんや

游瀛去高翔 游瀛し 去りて高翔す

六頭の龍が引く車の屋根は雲蓋にも届くほどであり、四、五人の仙人は逍遙とした様子で、芳しい部屋で休息する。八、九句では太陽と月の出ずるところの丹淵で水浴びをし、日や月の光の輝きを体に受け、仙人の体を清浄にすることを描く。詩の最後は、仙人は俗界の通靈台に落ち着くはずはなく、彼方へ高々と飛んで行くのみ、と結ばれる。通靈台は人間が仙との交流を望んで建てた台である。人間界に関する描写はこの建築物以外に見えない。

しかし、他の「詠懐詩」によって蓄積された人間界像と合わせ考えてみると「どうして人間界に落ち着くことがあろう」という地上世界への拒否にも似たこの一句は理解できよう。人間界は潔淨な仙境とは真反対な醜惡な空間であるためだ。人間界の劣悪さが仙界を形成する基盤となり、「詠懐詩」中の仙界の環境が整っていく。そして、仙境に関する描写もまた世上における人命の儻さ、俗世の暗澹さへと繋がっていき、仙界の清逸さに人間界への拒否の原因を読みとることができる。人間界への直接的な批判がなくとも、仙界に注がれた言葉の向こうに人間界の様相——醜惡である——を窺い知ることができるのである。

五 まとめ

「詠懐詩」において、仙界と人間界は、それぞれ善、悪に突出したイメージで形成されており、従前の仙界詩と比べ、その詠み分けがより明瞭である。「詠懐詩」中の仙界は、生命に長生をもたらし、俗世の煩雜さや愚昧さから解放された、阮籍にとってまさに理想の空間として描かれている。特に、俗世の煩わしさから逃れられる空間としての仙界を繰り返し詩に詠んでいる点が「詠懐詩」の特徴である。世の中には、阮籍の目には作為に満ちたものとして映り、彼はこうした俗世から身を遠ざけたいと願う。そして、その逃避先として「詠懐詩」中の仙界が形作られたのである。詩中において、両空間が深い関わりを持ち、人間界の醜惡が仙界の形象に影響を与えた結果、「詠懐詩」に詠まれた仙界に阮籍の独自性が生まれたのである。「詠懐詩」における仙界は阮籍の価値観に沿い、彼の理想とする空間へと変化を遂げたのである。

漢代及び建安の詩において、人間が仙界へ出かけていくことを詠んだ詩は少なくない。しかし、「詠懐詩」の中では、阮籍自身を含め、人間界に生息するものは人間界に留まったままであり、また、仙界に生きるものも人間

界に変化をもたらすことはない。二つの空間は互いに独立し、目に見えない防壁によって囲まれているかのようなものである。人間界は劣悪なままで、清められることはない。そして、仙界もまた俗世の醜悪に染まることはない。「詠懐詩」において、仙界と人間界に附された正負のイメージがここまで見てきたようにかくも明快であるのは、両空間が互いに決して相混じることがない完全に独立した存在であるためだろう。対照的な二つの空間のうち、阮籍は詩中において醜悪な人間界に止まり続け、理想とする空間——仙界——に行くことはない。彼の人間界に生きる悲しみ、またその悲しみを彼がどのように昇華しようとしたのかについては別の機会に論じたい。

注

- (1) 陳伯君『阮籍集校注』（中華書局）。これ以降引用する阮籍「詠懐詩」はこれによる。なお「詠懐詩」のうち十七首は「文選」に収載されている。
- (2) 吉川幸次郎『阮籍の「詠懐詩」について』（岩波文庫、一九九〇年版。初出は論文「阮籍の「詠懐詩」について」上・下、『中国文学報』第五冊・第六冊、一九五六年・一九五七年）
- (3) 逢欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）漢詩卷九「仙人騎白鹿、髮短耳何長。導我上太華、攬芝獲赤幢。來到主人門、奉藥一玉箱。主人服此藥、身體日康強。髮白復更黑、延年壽命長。崑崙山上亭、皎皎雲間星。遠望使心思、遊子戀所生。驅車出北門、遙觀洛陽城。蚩虫吹長棘、天天枝葉傾。黃鳥飛相追、咬咬弄音聲。佇立望西河、泣下沾羅纓。」
- (4) 『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩卷六「晨游泰山、雲霧窈窕。忽逢二童、顏色鮮好。乘彼白鹿、手翳芝草。我知真人、長跪問道。西登玉臺、金樓復道。授我仙藥、神皇所造。教我服食、還精補腦。壽同金石、永世難老。」
- (5) 『史記』秦始皇本紀に「三十二年、始皇之碣石、使燕人盧生求羨門、高誓」とある。羨門、高誓は古の仙人の名である。
- (6) 例えば、曹植「仙人篇」の「徘徊九天上」という一句に天上界の広がりを見ることができよう。また、仙薬によって、空へ羽ばたくことを描いた曹丕の「折楊柳行」や、曹植の「盤石篇」において「二學必千里」というように仙人の人間を

通かに凌駕する移動能力が詠まれている。

- (7) 漢魏の詩の中に、仙なるものと不老不死を関連付け詠んでいるものは管見の限り凡そ十六首ある（『先秦漢魏晉南北朝詩』による）。一方、仙界に思いを馳せる理由として俗世の劣悪さを挙げている詩については曹丕「雜詩二首」其の一の一首に止まる。曹植「五遊詠」において、天上界へ行く理由として「九州不足歩」と人間界の狭さを挙げているが、ここでは、世俗そのものというより人間界の空間的な限界への倦厭ととり、後者に含めないこととする。

- (8) 金谷治訳注『莊子』（岩波文庫、一九八三年）の「解説」によれば、「莊子において目ざされたものは、この人間社会の束縛から解放された絶対的な精神的な自由であり、自然と冥合した魂の安らぎであった」と莊子の理想とするところをこのようにまとめている。

- (9) 『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩卷一「駕虹霓。乘赤雲。登彼九疑歷玉門。濟天漢。至崑崙。見西王母。謁東君。交赤松。及羨門。受要秘道愛精神。食芝英。飲醴泉。柱杖桂枝佩秋蘭。絕人事。遊渾元。若疾風遊欵飄翻。景未移。行數千。壽如南山不忘憂。」

- (10) 『先秦漢魏晉南北朝詩』魏詩卷四「西山一何高。高高殊無極。上有兩仙僮。不飲亦不食。與我一丸藥。光耀有五色。服藥四五日。身體生羽翼。輕舉乘浮雲。倏忽行萬億。流覽觀四海。茫茫非所識。彭祖稱七百。悠悠安可原。老聃適西戎。于今竟不還。王喬假虛辭。赤松垂空言。達人識真偽。愚夫好妄傳。追念往古事。憤憤千萬端。百家多迂怪。聖道我所觀。」

- (11) 『詠懷詩』には物語を題材として作られた詩がある。例えば、其六十五「王子十五年、遊行伊洛濱。朱顏茂春華、辯慧懷清真。焉見浮丘公、舉手謝時人。輕薄易恍惚、飄飄棄其身。飛飛鳴且翔、揮翼且酸辛。」や其二「二妃游江濱、逍遙順風翔。交甫懷佩環、婉孌有芬芳。猗靡情歡愛、千載不相忘。傾城迷下蔡、容好結中腸。感激生憂思、萱草樹蘭房。膏沐爲誰施、其雨怨朝陽。如何金石交、一旦更離傷。」である。これらの詩は『列仙傳』に見える王子晉登仙の説話や二妃と交甫が出会う説話に基づいたものである。詩中に詠まれている人間界は物語世界の人間界であり、阮籍のいる人間界とは区別する必要がある。本論という人間界とは、阮籍と時空を共有する現実世界の空間と限定する。

- (12) 『文選』卷二九、「先秦漢魏晉南北朝詩」漢詩卷一二「生年不滿百、常懷千歲憂。晝短苦夜長、何不秉燭遊。爲樂當及時、何能待來茲。愚者愛惜費、但爲後世嗤。仙人王子喬、難可與等期。」

(13) 吉川幸次郎『阮籍の「詠懐詩」について』において、阮籍の詩が、漢代の詩や建安詩と大きな距離を示すのは、もはや従前の詩人のごとく、地上の快樂によって人生の苦惱を紛らそうとはしないことである、と指摘している。阮籍がそうしない理由として、世の中に悪意や怨毒にみちていることを挙げてゐる。

(14) 吉川幸次郎『阮籍の「詠懐詩」について』において、先行する諸家の神仙世界への憧憬と「詠懐詩」に見える仙界への憧憬の違いの一つとして以下のように述べられている。「それらはなお、無邪気なよりよき世界へのあこがれであり、阮籍のごとく、人間の生活の様相に熟視をかきかねてのちに求められているのでは、必ずしもない。阮籍のごとき形での神仙の世界へのあこがれは、阮籍にはじまるとしななければならない (p. 101)」と述べている。福永光司氏は「阮籍における懼れと慰め—阮籍の生活と思想—」(『東方学報』第二十八冊、一九五八年)において、「阮籍の神仙世界を詠んだ詩について」「彼の神仙への憧憬は、現実の醜悪さ、人生のはかなさと対比して歌われているのである」と述べている。また、「阮籍にとつて、神仙の世界は人間の悲しみと懼れを超越した眞實の世界、その眞實を象徴する世界であつた」と人間界の劣悪さを超越した空間、ちよつと神仙の世界がそうした空間の象徴であるため、阮籍が憧憬を抱くのだと分析をしている。

(15) 『先秦漢魏晉南北朝詩』漢詩卷九「邪徑過空廬、好人常獨居。卒得神仙道、上與天相扶。過謁王父母、乃在太山隅。離天四五里、道逢赤松俱。攬輿為我御、將吾上天遊。天上何所有、歷歷種白榆。桂樹夾道生、青龍對伏趺。鳳凰鳴啾啾、一母將九雛。顧視世間人、為樂甚獨殊。好婦出迎客、顏色正敷愉。仲腰再拜跪、問客平安不。請客北堂上、坐客既氍毹。清白各異樽、酒上正華疏。酌酒持與客、客言主人持。卻略再拜跪、然後持一杯。談笑未及竟、左顧勅中廚。促令辦粗飯、慎莫使稽留。廢禮送客出、盈盈府中趨。送客亦不遠、足不過門樞。取婦得如此、齊姜亦不如。健婦持門戶、一勝一丈夫。」

(16) 王宜瑗『魏晉遊仙詩与詩人的精神世界』(『中國學志』版号、一九九五年)において、魏晉の遊仙詩について、遊仙詩の中に描かれた仙境の多くは人間化、世俗化される傾向が見られる、と指摘している。その現象の一つとして、仙界に期待することの世俗化をあげ、仙界においても人間界と同じように酒を飲み、談笑することを詠んだ詩があることを挙げてい

る。

(てい つき)・お茶の水女子大学大学院博士後期課程